

学校文法における可算／不可算名詞及び動作／状態動詞の教え方を
認知文法の考え方を参照して検討する

**A Reconsideration of How to Teach Count / Mass Nouns and
Perfective / Imperfective Verbs from the Viewpoint of Cognitive
Grammar**

今井 隆夫

愛知みずほ大学人間科学部人間科学科

Takao IMAI

Division of Human Sciences, Department of Human Sciences, Aichi Mizuho College

It is frequently considered that grammar and communication are two opposite extremes, and they are less likely to be compatible with each other. Native speakers of any language, however, can understand or produce their mother tongue because they know the grammar of the language subconsciously. This fact leads us to realize that learning grammar is indispensable in acquiring communicative competence. The problem is that the grammar rules which have been employed in Japanese English education, especially in senior high school, are not necessarily effective in the EFL context. Thus “traditional school grammar” should be modified as soon as possible. Langacker’s cognitive grammar, the author believes, will surely fill the need to develop a new learning grammar.

In this paper, as for the grammar of nouns and verbs, Langacker’s theory will be introduced. The author will then go on to discuss some examples of applying Langacker’s theory in the classroom.

Key words: cognitive grammar, TEFL, bounded / unbounded, count / mass nouns, perfective / imperfective verbs

I. はじめに

これまでの英語教育では、名詞には可算名詞と不可算名詞があり、動詞には状態動詞と動作動詞があった分類がされ、時には、そのような分類があるものの、例外的に可算名詞が不可算名詞として振舞うことがあり、不可算名詞が可算名詞として振舞うといった現象がある

とされ(動詞の状態と動作についても同様)、1つ1つの名詞・動詞について、可算か不可算か、状態か動作か、といった情報を覚えていくことが常識であった。

しかし、ここ数年の Langacker の認知文法の研究成果からは、名詞の可算・不可算というのは、名詞によって決まっているのではなく、可算・不可算という概念は単に名詞の用法であり、ほとんどすべての名詞が、コンテクス

トや捉え方次第では、可算にも不可算にも振る舞うことができるといったダイナミックな捉え方がされるようになってきた。Langacker(2008: 144)では、

By mashing a dozen potatoes, you get enough potato for this recipe.

という例を挙げ、potato という名詞が可算名詞としても不可算名詞としても振る舞うことが指摘されている。つまり、初めの potatoes は丸ごとのジャガイモがいくつかあるので可算名詞として捉えられているのに対し、後の potato は料理するためにつぶされたジャガイモを表すので不可算名詞として捉えられている。

また、可算用法(count nouns)と質量(不可算)(mass nouns)用法を決める動機付けとして、表1に示される3つの要因が挙げられている。(Langackerはcount/massという用語を用いているので、本論文では、それに合わせ、以下では可算/質量という用語を用いる)

つまり、可算名詞(count nouns)は、境界があり内部が不均質で、増大させるには複製する必要があるのに対し、質量名詞(mass nouns)は、境界がなく内部は均質であり、伸縮自在であると捉えられる。

(表1: 可算・質量名詞のコア・イメージ)

count(可算)	mass(質量・不可算)
bounded (区切りがある)	unbounded (区切りがない)
heterogeneous (内部は不均質)	homogeneous (内部は均質)
replicability (増加させるには複製する)	expansibility/contractibility (伸縮自在)

さらに、この名詞の可算・質量という区別が並行的に、動詞の動作・状態にも当てはまるという指摘がされている。つまり、動作動詞(perfective)は、境界があり内部が不均質で、増大させるには同じ行為を繰り返す必要があるのに対し、状態動詞(imperfective)は、境界がなく内部は均質であり、伸縮自在であると捉えられるのである。

Langacker(2008: 149)では、

- (a) Sam {*lies/is lying} on the bench right now.
- (b) Belgium {lies/*is lying} between Holland and France.

という例を挙げ、安定性が一時的なものであるか永続的なものであるかのどちらかに捉えられるかによって、同じ動詞が、動作動詞として振る舞うか、状態動詞として振る舞うかが決まることが述べられている。(a)では、Sam は今の時点(right now)ではベンチに横になっているが、人間は、移動するので一時的なことと捉えられているので一時性をあらわす、be + V-ing 形と相性がよいのに対し、(b)では、国は、何らかの政治的な理由によって無くならない限り、そこに永続的にあるものと捉えられるのが通例であるから、永続性を表す、単純現在形が用いられていると述べられている。

本論文の目的は、認知文法の考え方をLangackerを中心に紹介し、その理論的枠組みを基盤として、名詞の可算・質量と動詞の動作・状態のよりわかりやすい教え方を検討することである。

II. 英文法の基盤にある認知能力

2.1 英文法の基盤にある認知能力

認知言語学では、言語能力も認知能力の反映の1つであり、そこには人間の身体性・感性、事態に対する捉え方が反映されていると考える。この考え方を基盤に、教育英文法を考えていく場合、文法現象を統括する抽象レベルの概念として、次の4つが根底にあると筆者は暫定的に仮定する。それらの抽象レベルの概念は、

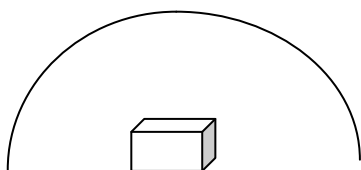
- ① カテゴリー化
- ② 図と地の分化・反転
- ③ 参照点能力
- ④ granularity (schematicity/specificity)
(対象をどの程度の精密度で捉えるか)

の4つである。(なお、この論文の後に執筆され、先に発行された Imai(2008)では、比喩能力を加え、5つとしてある) なお、これら4つの基盤となる認知能力は、相互に排他的にある言語現象の基盤にあるのではなく、同時に2つ以上が関与することが多いという性質のものである。換言すれば、事態をどのように捉えるか次第で、1つではなく、複数の認知的基盤からある言語表現の説明が可能ということである。以下、1つずつ詳しくみていきたい。

2.2 カテゴリー化

英文法の基盤になる認知能力の1つ目は、カテゴリー化の能力である。人が事態をどのようにカテゴリー化するかは仕組みが言語にも反映されているので、プロトタイプ理論の考え方が言語にも現れていると考えると説明が付く言語現象が非常に多くある。単純化して言えば、言葉というのは世界の一部を切り取って、そこに名前を付けたものである。同じ名前が指し示す概念・グループの構成員の選び方がカテゴリー化であるといえる。つまり、カテゴリーの成員はすべてが、同じ特徴を共有しているのではなく、そのカテゴリーの成員であるべく、より多くの特徴をもつもの(プロトタイプ事例)から、ほとんど持たないもの(周辺事例:peripherals)までが、何らかの類似性、関連性があるために1つのグループにまとめられている。いわゆる、家族的類似性 (family-resemblance)という概念の元に、つながっているという考え方である。

図1:over のコア・イメージ



例えば、鳥のカテゴリーには、ハト、スズメ、ツバメ、カラス、ニワトリ、ガチョウ、ペンギン、などが入る。どれもが同様に鳥らしいのではなく、誰もが鳥の代表としてあげるプロトタイプ(中心事例)から、あまり鳥らしくない鳥(peripherals:周辺事例)までが含まれる。言語現象では、多義性の基盤には、このカテゴリー化の認知能力がある

と考えられる。「形が同じならば、そこには共通の意味がある」という田中(2006)の指摘とも関連するが、ある語彙の多義であると捉えられてきたそれぞれの意味は、1つの語彙(同じ形)にカテゴリー化されているので、そこには共通性や関連性があると考えられる。具体例として、前置詞 over の場合をみてみたい。

- a) The dog jumped **over** the fence.
- b) There are some clouds **over** the mountains.
- c) John's house is just **over** the hill.
- d) Jack has been seeing Maria **over** the years.
- e) School is **over**.
- f) Let's talk about the issue **over** a cup of coffee.

a では、コア・イメージの全体がハイライトされている。b では真上の部分がハイライトされている。c では、常識から、家が空中に浮かぶということは、現在の科学技術では考えられないため、越えたところ(終点)がハイライトされ、「John の家は、丘を越えたところにある」という意味になる。このように言語表現の意味は言語以外の知識との相互作用で決まる。d,e は、空間ではなく時間上で考える。つまり、over のコア・イメージが時間という概念領域に適用されていると考える。d は Maria と何年も付き合っているという意味であるが、時間を超えて続いている感覚である。e は「学校が終わった」という意味を表すが、これも時間軸上で、学校の授業時間を超えた時点で自分があるという感覚である。日本語訳につられて、「学校が終わった」を School was over. と表現する人がいるが、これは、過去のある時点で、学校が終わっていたという意味になる。f は「コーヒーでも飲みながら話そう」ということですが、コーヒーを挟んでその上で会話がされているイメージを浮かべれば理解できる。なお、本来なら、コーヒーカップは人数分だけあるはずですが、言葉の綾で、単数形となっている。つまり、over という語にさまざまな意味があるかのように思われるが、そのすべての意味の基底には図1で表わされるような共通のイメージがあり、お互い、類似性や隣接性によりつながっている。over という語の元にカテゴリー化されていると考えると説明が付く。

2.3 図と地の分化・反転

2 つ目の認知能力は、図と地の分化・反転である。図 2 において、1 つの図形から 2 つの絵を見ることができるよう(人間の顔と杯)、言語表現においてもある1つの単語に多義を認知することができることや同じ事態を表現するのにその事態のどこをピックアップして言語化するかによって複数の表現が可能であることは、この能力の反映と考えることができる。



図 2 : 図と地の反転

例えば、ボトルに半分ワインが入っている状況を言語化する場合、入っている部分を図と捉えれば、*This bottle is half full.* という言語表現ができるのに対し、入っていない部分を図と捉えれば、*This bottle is half empty.* という言語表現ができる。

また、*Breakfast is served from 7:00 to 11:00.* といったホテルの案内文で用いられる受身文も、朝食を出すのはホテルであるが、ホテルの役割は地となり背景化され、朝食が出されるという行為が図になって前景化している表現と捉えることができる。

さらに、ある名詞が可算名詞／質量名詞のどちらで捉えられるかの問題も図と地の分化・反転で考えることができる。例えば、次の例文では、

- (a) I like coffee.
- (b) I'll have a coffee.

(a)は容器内に入った珈琲(液体)が図となった表現なので、質量名詞扱いされているのに対し、(b)では容器が図になった表現なので、可算名詞扱いされていると捉えることができる。

さらに、2.2 のカテゴリー化で例として挙げた *over* の多義性も、図と地の反転によっても説明できる。つまり、

over のコア・イメージの図において、どの部分が図となり前景化するかによってさまざまな意味がみえてくると考えるのである。

2.4 参照点能力

3 つ目の認知能力は、参照点能力である。この能力は図 3 に見られるように、認知主体・概念化者である人間(C: Conceptualizer)が、あるもの(Target)を指示したいときに、そのものを直接指す代わりに、より目につきやすい別のもの(参照点:Reference Point)を指すことで、聞き手は、その参照点を手がかりに、Target にアクセスするというプロセスを表わす。日常生活における具体的としては、道案内をする際に、相手が知っている場所や目に付きやすい場所を参照点として挙げることで、目的地を教える場合が考えられる。

また、言語コミュニケーションにおいては、すべての言語表現は参照点と捉えることができる。つまり、話し手が意図することは言語表現という参照点として与えられ、聞き手はその参照点を手がかりとして、語彙・文法知識、背景知識、文脈情報(心の理論:cf. 柳瀬: 2007)などに基

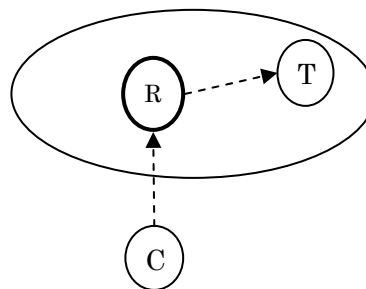


図 3 : 参照点構造

づいて推論を行うことで、話し手が意図するターゲット(話し手の意図)に辿り着くのである。代名詞、所有表現、語彙や構文が多義になる過程や偶発的な比喩表現などの理解にも参照点能力は大きく関与していると言える。

例えば、言語コミュニケーションにおける意味解釈の1つに、比喩の理解があるが、この比喩の理解のプロセスには、参照点能力が深くかかわっていると考えられる。つ

まり、比喩というのは言葉にできないものを言葉にするために人が用いるものであると考えれば、聞き手の側には、その言葉にされたものを手がかりに、言葉にできない部分、つまり、その比喩表現が具体的に意味するものを推論する必要が生まれてくると言えるが、この推論には参照点能力がかかわっている。

また、多義語の意味のつながりを考える場合にも、参照点能力が基盤にあると言える。例として、動詞 observe の意味のつながりをみてみたい。

動詞 observe については、受験勉強で「言う・見る・守る」などと語呂合わせで意味を暗唱した経験のある方も多いかもしれません。では、言う・見る・守るといった一見無関係に思われる意味が、どのように関連しているかをここではみていきたい。

- (1) observe のプロトタイプの意味は{じつと観察する}であると仮定する。
- (2) コアは{何かの存在に気づく}と仮定する。
- (3) {じつと観察する}というプロトタイプから{観察の結果}→{何かに気づく}とコアが抽出される。
- (4) 次に拡張事例である。{何かに気づけば}→{話したくなる}ことはある
- (5) {何か規則や法則性に気づけば、守る}のが社会的人間の行為である→{(規則など)を守る}
- (6) さらには、{(祝うべき事)に気づいていれば}→{祝う}といった拡張事例もメトニミーによって説明が可能である。

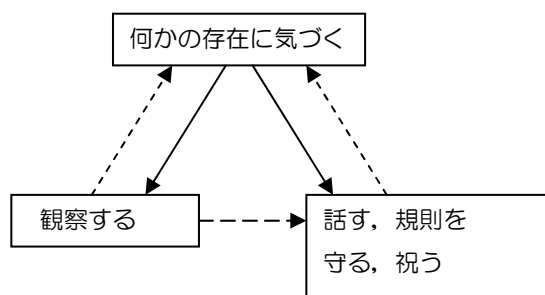


図4:observe の分析

このように考えれば、observe の意味として、辞書に記述されている意味は概念上の隣接性(メトニミー)によって繋がっていることが理解できる。このメトニミーという比喩の基盤にある認知的基盤も、参照点能力なのである。

なお、このような認知的動機付けを行う場合の前提として、次の河上(1996)の指摘に留意する必要がある。

動機づけというのは予測可能なものではないという点である。カテゴリーの拡張関係は、「予測」されるものではない。(中略)むしろ、なぜそのような拡張を人間が行ったのか、なぜ関係の慣習化が行われたのかを「理解」するものなのである。(河上1996:50)

2.5 対象をどの程度の精密度で捉えるか

4 つ目は granularity の能力である。これは対象をどの程度の精密度で捉えるかという問題である。「人は皆同じで、皆違う」という表現が表すように、人は、人間というレベルで見れば、皆同じカテゴリーに入ると捉えられるが、一人一人が顔かたちも性格も違うという視点で捉えれば、皆違うと言える。これが、対象をどの程度の精密さで捉えられるか次第で、ある対象が、同じものと捉えられたり、違ったものと捉えられたりすることの一例である。英文法では、名詞の可算用法・質量用法の区別や動詞の完了用法(perfective)と未完了用法(imperfective)の識別の背後には、この granularity という認知能力があると考えよう。うまく説明が付く例が多い。これらの具体例については後の章で詳しくみていくが、ここでは、Lee (2001)からの例をみてみたい。道具を表す単語に tools と equipment があるが、前者は対象を可算名詞扱いたした語であるのに対し、後者は対象を質量名詞扱いたした語である。その理由は、対象をどの程度の精密度で捉えるかという認知能力が深くかかわっているといえる。道具にはさまざまなものがあるわけだが、作業を容易にするものという抽象度が高いレベルで捉えれば、どれも作業を容易にするという同じ機能をもつものと捉えられるので、equipment という不可算名詞を使うが、個々の道具をより具体的に、それぞれの機能の違いに注目した精密度で捉えれば、違っ

た道具ということになるので、tools という可算名詞で表わされる。同様のことは、poetry と poems, cutlery と knives, forks, spoons, etc.、furniture と desks, chairs, tables, etc. などの区別にもみられる。つまり、人は、ある対象を精密度を調整して見るという認知能力を持っており、その認知能力が言語表現にも反映されていると考えられる。

Ⅲ. 名詞(可算/質量 [Count/Mass])と動詞(完了/未完了[perfective/imperfective])

3.1.1 有界性の概念(1):名詞の可算用法と質量用法

Ⅱで述べたような「プロトタイプ理論によるカテゴリー化の原理」と「granularity の能力」が、名詞の count/mass の識別についてもあてはまる。つまり、count/mass のいずれも、プロトタイプ事例から周辺事例までが放射状に分布し、境界線の部分になるとどちらに入るかは判断が難しいものもあるが、これもカテゴリー化という認知プロセスが反映されたためと考える説明が付く。可算名詞と質量名詞のコア・イメージは次節のように要約される。

3.1.2 可算名詞と質量名詞のコア・イメージ

A. count nouns:

bounded / heterogeneous / replicable

区切りがあり、内部は不均質と捉えられる、増大させるには同じグループに属するものを複数個おく

B. mass nouns

unbounded / homogeneous / contractible, expandable

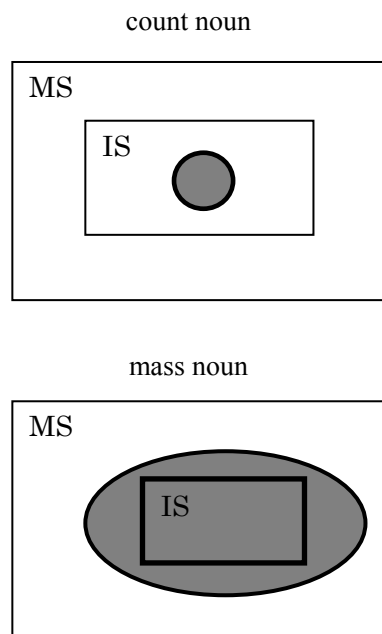
区切りはなく、内部は均質と捉えられる、変化なく伸縮自在である

Langacker では、図 5 のようなイメージ図式で表わされている。

なお、プロトタイプか周辺事例かでコアの実現度が異なるという点にも注意したい。つまり、プロトタイプ事例は上で述べたコア・イメージの特徴すべてを持つが、周辺事例はそれらの特徴すべてを持つとは限らないが、それ

でもなお、カテゴリーの一員と捉えられる点である。

ここでの考え方の重要な点は、名詞に可算(count)と不可算(mass)という区別があるわけではなく、それぞれの状況で人間がその名詞をどのように捉えるかの問題であると考えられることである。例えば、直径 5m 程の赤の○が壁面に描かれているとしましょう。この赤丸を遠く離れたところから見れば、それは1つの境界のある赤丸と捉えられるので、(a) I see a red spot.と表現できるのに対し、30cm くらいまで接近して見れば、境界のある赤丸には捉えられないので、(b) I see red.という表現になる。同じ存在が(a)では、count noun と捉えられるのに対し、(b)では mass noun と捉えられる例である。



(Langacker 2008: 133: Figure 5.3)

図5: 可算名詞と質量名詞

以下、同様の例を Langacker から紹介する。

- 1 (a) After a cat got in the way of our SUV, there was cat all over the driveway. (Langacker 2008: 144)
- (b) I don't like shelf—I'd rather eat table. (Langacker 2002: 73)
- (c) When he finished using his knife to tunnel through

the stone wall, it had very little blade left. (Langacker 2002: 73)

1 (a)では cat のように、通例「可算用法」(count)で捉えられる名詞でさえも、ここでの文脈では不可算用法(mass)として捉えられている。これと関連して、英語学習者の作り出す誤文とされるものに、I like dogs.と可算用法で言うべきところを、I like dog.と不可算用法で言うという例があるが、これは文化的コンテキストから日本やアメリカでは非文と見なされるが、犬を食べる文化圏での発話であれば、意味のある発話である。このように、ある文が、自然か不自然かという判断には、英文以外のコンテキストが大きく関わっているのである。

1 (b)では shelf や table は概念化者が人間であれば、食べ物にはカテゴリー化されることはないのでこの例のように不可算名詞として捉えられるのは不自然であるが、アニメの中のシロアリの発話と考えれば、この文も自然な表現となるのである。ラネカーは、知能の高いシロアリの発話としてこの例を挙げている。

1 (c)では、通例、ナイフの刃は形が崩れることはないで、可算名詞として捉えられるが、この文脈のように、硬い石を切ろうとした結果、刃の方が削られてしまったという文脈では、不可算名詞として捉えられるのである。

3.1.3 ある名詞が可算にも質量に捉えられる場合

名詞の中には、可算的用法と質量的用法の両方もち、用法によって明らかに意味が異なるものがあるという事実は、可算／質量の区別には意味的基盤があるという主張にとって強力な論拠となると言える。(cf. 宮浦 2006: 183) つまり、同じ名詞であっても文脈により、「境界があり、内部が不均質、増加させるには複製する」と捉えられる場合と、「境界がなく、内部が均質、伸縮自在」と捉えられる場合があるということである。具体例で観察してみよう。

2. (a) There are some eggs in the basket.
(b) You've got some egg on your tie.

3. (a) There are a lot of newspapers in the box.
(b) There is a lot of newspaper in the box.

4. (a) There is a hair in my soup.
(b) Hair is styled by hairdressers.

2 の(a)では、籠の中に原形を保った卵が入っているので可算名詞として捉えられるのに対し、(b)では、料理された卵がネクタイについているので、不可算名詞扱いとされる。関連して、You've got egg on your face.という慣用表現があるが、ここでも顔に卵が付く場合は、割れた卵であるから不可算名詞扱いとなる。

3 の(a)では、これから読まれる何社かの新聞が箱に入った状態を表すのに対し、(b)では、内部が均質で、境界がないと捉えられた新聞を表すので、いらぬ新聞、古新聞の意味になる。

4 の(a)では、髪の毛がスープの中に入っていれば、それは境界がある 1 本の髪の毛であると捉えられるので、可算扱いされるが、(b)では、美容師が髪の毛をセットする際には、1 本 1 本というより、全体として均質なものと扱うので質量名詞として扱われる。つまり、質量名詞のプロトタイプである水などの液体の延長線上で捉えられると考えると良い。

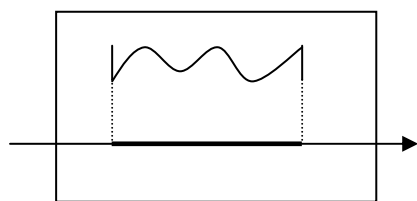
3.2 有界性の概念(2):-動詞の「完了(perfective)用法」と「未完了(imperfective)用法」

3.1 で述べた、名詞の「可算用法」(count nouns)と「質量用法」(mass nouns)の関係が、時間レベルでは、動詞の「完了(perfective)用法」と「未完了(imperfective)用法」にも並行的に適応できる。これは、空間における count / mass の概念が、時間に比喩的に用いられたと考えることもできる。(※空間から時間へのメタファーは一般的現象:抽象的で捉え難い「時間」という概念を具体的に捉え易い「空間」で捉える) まず初めに、Radden, G & Dirven, R. (2007)に基づいて、背景となる概念を整理する。

3.2.1 動詞の完了用法と未完了用法

perfective (動詞の完了用法) と imperfective (動詞の未完了用法) の基本イメージは次に示すとおりである。

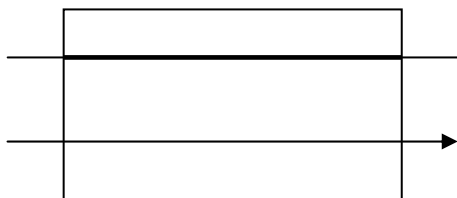
perfective: 時間における区切り(始まりと終わり)があり、内部は不均質と捉えられる場合
⇒ 増大させるには同じ行為を繰り返す。



fall, jump, kick, cook, die ...

図6:完了動詞(perfective verbs)

imperfective: 時間における区切り(始まりと終わり)がなく、内部は均質と捉えられる場合
⇒ 変化なく伸縮自在



imperfective

be, have, know, like, resemble ...

図7:未完了動詞(imperfective verbs)

名詞に可算・不可算という区別があるのではなかったのと同様に、動詞についても perfective な動詞と imperfective な動詞という区別があるわけではなく、それぞれの状況で人間がその動詞によって表される事態をどのように捉えるかの問題である。つまり、言語はダイナミックなものであるからコンテキストが整えば、いずれの用法でも用いられ可能性があると考えられる。具体的な動詞を例に図で表すと、以下ようになる。図6は perfective verbs のイメージである。いずれの動詞も始まりと終わりが

あり、その行為のどの一時点を取り出しても、他の一時点とは異なると捉えられる。一方、図7は imperfective verbs のイメージである。始まりと終わりがあるとは捉えられず、どの一時点も均質と捉えられる。

3.2.2 出来事(event)及び状態(state)が be + V-ing 形になるプロセスの違い

ここでは、Raden & Dirven (2007)に基づいて、event 及び、state が be + V-ing 形になるプロセスを整理する。event(perfective)も state(imperfective)も be + V-ing 形になる場合、結果としては、始めと終わりがあることの途中であることがハイライトされるという点では同じ事態を表すことになるが、そのプロセスは異なる。Raden & Dirven (2007: 177)では、次のように述べられている。

The English progressive aspect thus has one unitary meaning for events and states, which may be described as ‘unboundedness with implicit boundaries.’ This meaning is, though, the results of different conceptual processes: with events, the temporal boundaries are defocused, with states, implicit temporal boundaries are imposed.

perfective/imperfective という用語を用いて、言い換えれば、次の(a)(b)のようになる。

(a) perfective な動詞(始まりと終わりがある)が be + V-ing 形になると、始まりと終わりは背景化され、途中にあることが意識される。(imperfective 化) (図8(i)から(ii)への変化)

(b) imperfective な動詞(始まりと終わりはない)が be + V-ing 形になると、背景として始まりと終わりが意識されるようになり、perfective な動詞と同様に途中にある意味を表すため、一時性の意味解釈されるようになる。(図8(iii)から(ii)への変化)

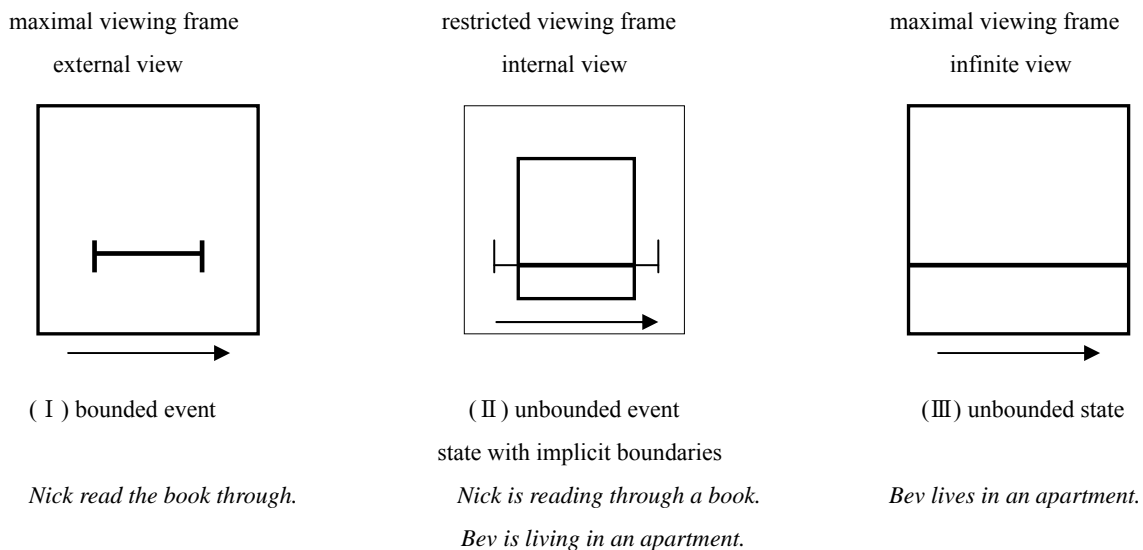
図9は perfective verbs (bounded events) をその内部構造の違いから分類したもので、図10では、図9で accomplishments, activities, achievements, acts の4つに

分類されたもの、それぞれが **be + V-ing** 形になった場合の認知図式が示されているが、いずれも抽象度を上げて観れば、始めと終わりがあり、その途中という共通の概念で纏められると言える。

図 11 では、**imperfective (states)** が **be + V-ing** 形になることで、地として、始まりと終わりが意識され、一時的な状

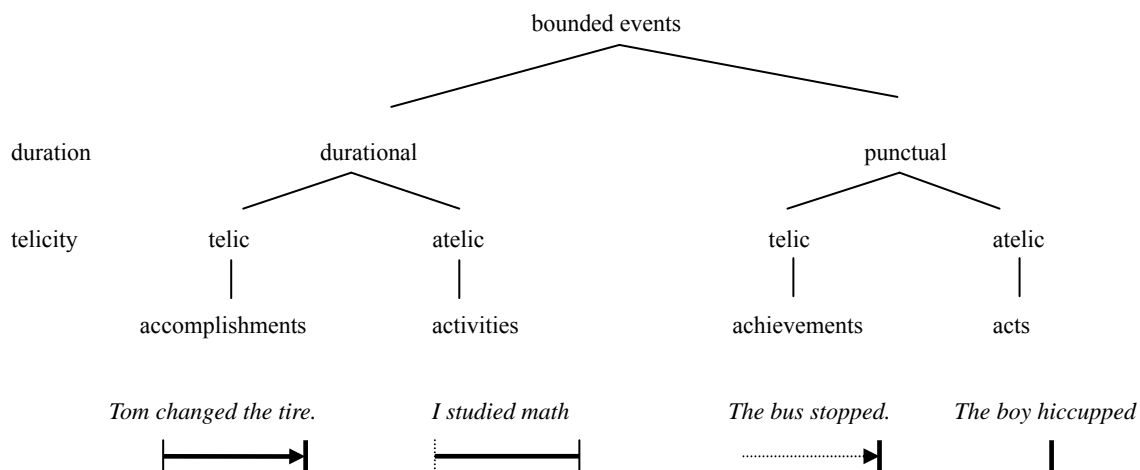
態が表され、その途中にあるという捉え方ができる。これらの場合も、図 10 で **perfective** が **be + V-ing** 形になった図と抽象度を上げれば同様に捉えられる。

以上から、**be + V-ing** 形のコアイメージは、「始まりと終わりがあり、その途中がハイライトされた表現」と纏めて、問題がないと考えられる。



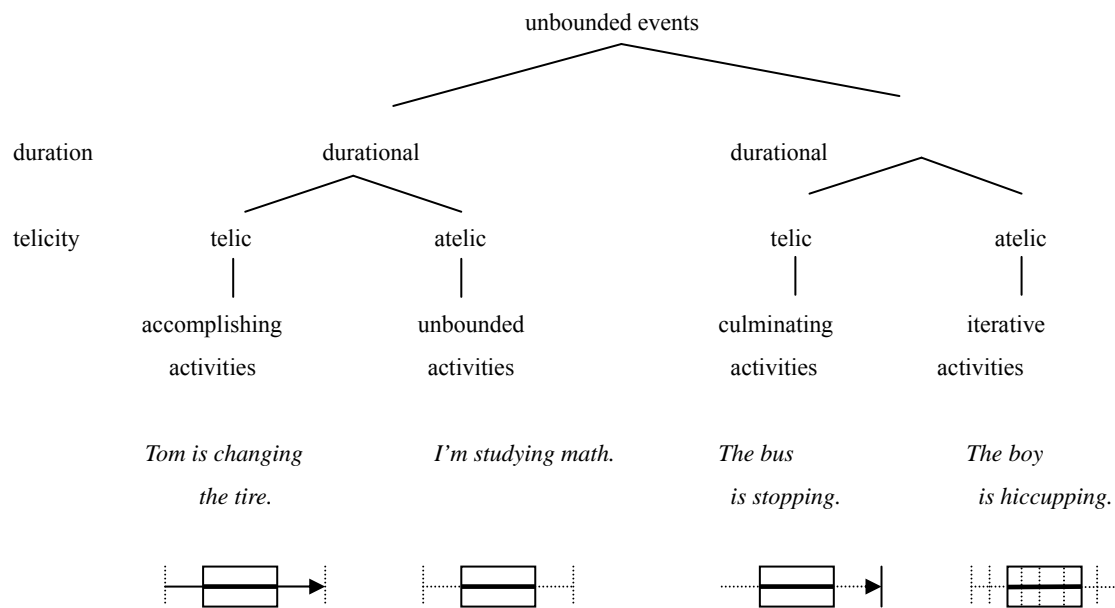
[cf. Radden, G & Dirven, R. (2007: 178: Figure 8.2)]

図8: Time schemas of the three basic aspectual classes



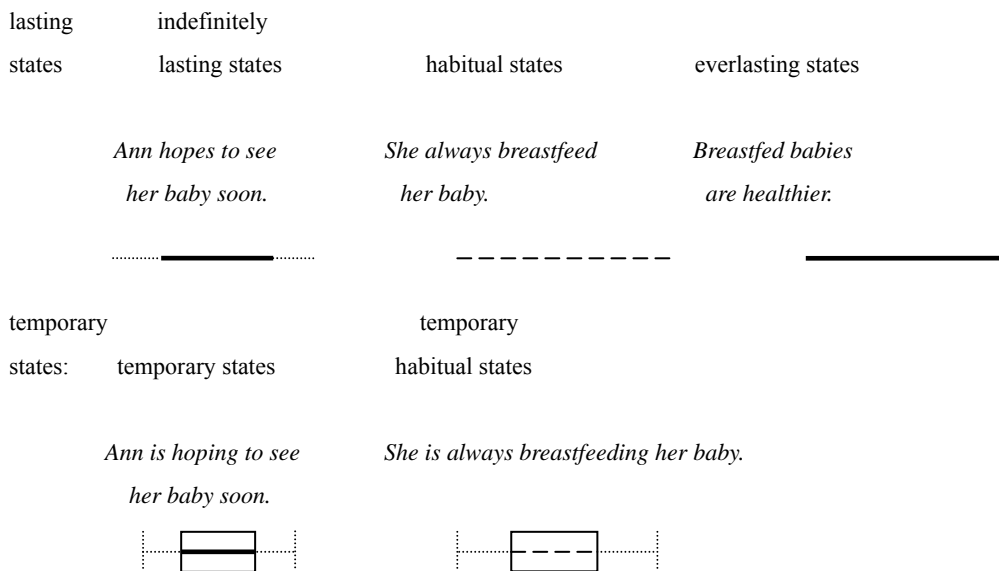
[cf. Radden, G & Dirven, R. (2007: 180: Figure 8.3: Types of bounded events and their time schemas)]

図9: Types of bounded events and their time schemas



[cf. Radden, G & Dirven, R. (2007: 181: Figure 8.4: Types of unbounded events and their time schemas)]

☒ 10: Types of unbounded events and their time schemas



[Radden, G & Dirven, R. (2007: 191: Figure 8.6)]

☒ 11: Types of states

3.2.3 ある動詞が文脈次第で、完了用法にも未完了用法にも捉えられる場合

ここでは、同じ動詞が捉え方次第で、perfective にも imperfective にも捉えられる例を紹介する。伝統的な学校英文法では、進行形にならない動詞として教えられてきた、resemble, live, be, stand などの状態動詞と分類された動詞も、状態を表わすか動作を表わすか、換言すれば、imperfective か perfective かは動詞によって決まっているのではなく、単にある文脈ではどちらに捉えられるかという問題に過ぎないのである。以下の具体例 1~6 について、解釈を考えてみたい。

1. (a) I drive a Honda.
(b) I'm driving a Honda.

(a)は、「ホンダ車に乗っている」という習慣的な意味を表わすのに対し、(b)は「今はホンダ車に乗っている」という一時的な意味となる。

2. (a) I go to UC Berkeley.
(b) I'm going to UC Berkeley.

(a)は、「UC Berkeley に通っている」という、その学生であることを表わす意味であるが、(b)は交換留学生などの制度によって、一時的に通っているという解釈を受ける。または、「Where are you going?」という質問文の答えとして用いられれば、「UC Berkeley へ行く途中」といった、実際の物理的移動の途中という解釈もあり得る。

3. (a) A statue of Rodin stands in the lobby.
(b) A statue of Rodin is standing in the lobby.

(a)も(b)も、「ロビーにロダンの象が立っている」という意味を表わすが、(a)は常時であるのに対し、(b)はロダン展の会期中だけといった、一時性の解釈を受ける。

4. (a) I live in an apartment.

- (b) I'm living in an apartment while my house is being remodeled.

(a)は「アパートに住んでいる」という意味に対し、(b)は「家が改装中の間だけ、アパートに住んでいる」といった一時的意味である。

5. (a) Maria resembles her mother.
(b) Maria is resembling her mother more and more.

(a)は「マリアは母親似である」という意味であるが、(b)は「だんだんと母親に似てくる」という意味を表わす。これは、be + V-ing 形で動詞が用いられる場合、その動詞が perfective であると捉えられるので、perfective 用法の特徴の一つ、内部が不均質、という要素からの意味拡張で、変化の意味がでてきたと考えられるのではないかと予測する。つまり、時間的に不均質ということは、変化するからであるという捉えられることから、図と地の反転によって「変化」という側面が前景化してきたと考えられる。

6. (a) He is weird.
(b) He is being weird.

(a)は「彼はいつも変だ」という意味に対し、(b)は「今だけ変だ」という一時的解釈を受ける。

IV. 授業実践のための認知文法的教育英文法

4.1 教育英文法を開発するための前提

ここでは、以上まとめながら紹介してきた Langacker を中心に開発された認知文法を参照した、認知文法的教育英文法とでも名付けられるものの理論的枠組みを整理する。

認知文法の考え方を参照して、英語教育に応用する場合に注意しなければならないことは、その目的が、認知文法自体の研究ではなく、認知文法の考え方を参照して、英語学習をより支援する新しい教育英文法を開発

することにあるので、文法学としての説明の普遍性や正確さは犠牲にしてもわかりやすさ、簡潔さを優先するという立場をとる場合があるということである。この視点から、名詞の可算／質量及び動詞の perfective／imperfective という概念については、次節のような理論的枠組みのレベルで整理する。

4.2 名詞の可算／質量と動詞の perfective / imperfective に関する教育英文法の理論

名詞について、空で適応できる、可算／質量の考え方が、時間で適応すれば動詞にも当てはまると考える。名詞も動詞も、その用法には次の2つがある。

(A) 境界があり、内部が不均質で、増大させるには数を増やすというコア・イメージを持つグループ
⇒可算名詞と完了動詞

(B) 境界はなく、内部は均質、伸縮自在というコア・イメージを持つグループ
⇒質量名詞と未完了動詞

個々の名詞や動詞はそれぞれ、より(A)グループと捉えられる場合が多いものと、より(B)グループと捉えられる場合が多いものに分類することはできるが、いずれのグループに分類されたものもコンテキスト次第ではもう一方のグループのメンバーと解釈することが可能であるため、教育英文法では、名詞や動詞自体に、可算／質量・完了／未完了といった区別があるのではなく、コンテキスト次第で、どちらにも捉えられる可能性があるダイナミックな現象であるという立場を取る。

名詞の場合、(A)グループと捉えられる場合、境界があり、増大させるには数を増やすので、その特徴を反映した文法現象として、「a(an) + 名詞」や「複数形」といった形で用いられることがある。一方、(B)グループの場合は、境界がなく、伸縮自在なので、個別の区切りや数の増大を示す形に変化することはなく、裸名詞の形になる。

動詞の場合は、(A)では、be + V-ing 形で用いられる。この be + V-ing という形の意味は、始まりと終わりがあることの途中であることを表すので、始まりと終わりがあると捉えられた事態、つまり、時間的な境界がある perfective な事態と相性がよいからである。一方、(B)は、時間的に境界がないと捉えられた事態であるから、始まりと終わりが意識された be + V-ing 形とは相性がよくない。どこも均質で、どの一時点をピックアップしてもそれが全体の代表となる事態であるからは、発話時に事実と捉えられていることを表す単純形(現在／過去)と相性がよい。

つまり、「a(an) + 名詞」や「複数形」という文法的特徴がみられる場合は、その名詞は(A)の解釈を受け、裸名詞で用いられている場合は、(B)の解釈を受けると考える。

動詞についても同じで、be + V-ing という文法的特徴がみられる場合は、(A)の解釈を受け、単純形の場合は、(B)の解釈を受けると考える。

4.3 現在形・過去形と perfective / imperfective

Langacker (1991: 87-91)で述べられており、Lee (2001: 150-153)で Langacker に基づいて解説がされている問題に、「現在形と過去形のイメージ」と「perfective / imperfective」な動詞がそれぞれの形で用いられたときにどのような読みになるかということがある。本節では、この点を英語教育に応用するために簡単に整理してみたい。

Langacker (1991:89)では、英語の現在時制と過去時制に次のような定義が与えられている。

- a. Present: A full instantiation of the profiled process occurs and precisely coincides with the time of speaking.
- b. Past: A full instantiation of the profiled process occurs prior to the time of speaking

つまり、現在時制はプロファイルされたプロセス全体が取り上げられ、それが発話に要する時間と一致するもので

ある。過去時制は、プロファイルされたプロセス全体が取り上げられ、それが発話より前に起こったことである。

では、Langacker の定義及び論に並行して、オリジナルの例で、(a)そのプロトタイプの用法が *perfective* である動詞と(b)そのプロトタイプが *imperfective* である動詞について、それらが現在時制と過去時制で用いられた場合、どのような読みがどのような理由で起こるかを整理してみたい。

なお、動詞の *perfective* / *imperfective* というのは、名詞の *count* / *mass* と同様に、それぞれの動詞に *perfective* か *imperfective* かという区別があるのではなくあくまで用法にすぎないが、ここでは、プロトタイプの方法ではどちらかに分類できるという意味で、*perfective* な動詞、*imperfective* な動詞という呼び方をすると確認しておく。

1. Jack skipped breakfast this morning.
2. Jack lived in Nagano three years ago.
3. Jack lives in Nagano.
4. Jack skips breakfast.

例文 1 は、始まりと終わりがある *perfective* な読みになる。それが過去時制で用いられているので、図 12 (a) で表わされるように、過去に完結した行為を今述べているイメージを表す。

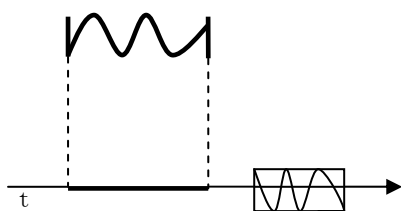


図 12 (a)

なお、図 12(a, b, c, d)において、上側の波線または直線は動詞によってあらわされるプロセスを表す。*perfective* は、始まりと終わりがあり、変化するので波線で表わされ、*imperfective* は境界がなく内部が均質であるから、直線で表わされている。太線になっている部分は、図となりハ

イライトされている部分である。下側の *t* の線は、時間軸である。時間軸上にあるボックスは、発話に要する時間を表す。

例文 2 は、始まりと終わりは意識されない *imperfective* な読みになる。それが、過去時制で用いられているので、図 12 (b) で表わされるように、過去に完結した状態を今述べているイメージを表す。

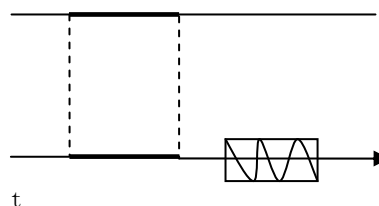


図 12 (b)

しかし、ここで興味深い点が1つある。次の例文 5 をみよ。

5. Jack lived in Nagano three years ago, and he still does.

この文が、自然である理由の説明は、*live* はそのプロトタイプの意味は、*imperfective* であるから、初めと終わりという境界は意識されないのが普通である。よって、図 12 (b)でも表わされているように、2 の文では、3 年前の部分が図となりハイライトされているが、地として、*live* という状態が境界なく続くイメージが背後にあるので、5 のような発話は矛盾なく理解されるのである。

例文 3 も、始まりと終わりは意識されない *imperfective* な読みになる。それが、現在時制で用いられているので、図 12 (c) で表わされるように、発話に要する時間と対応する部分がプロファイルされて取り上げられている。

この考え方も、例文 2 での考え方を現在に当てはめるだけでよい。*live* は *imperfective* な読みがプロトタイプであるから、図 12 (c)の上の線で表わさせるように、境界のないプロセスである。過去時制の場合に、過去の部分が図となりハイライトされたのと同様に、発話時(今)の部分が図となりハイライトされたと考えればよい。このようなことが可能なのは、*imperfective* な動詞の特徴の一つに、内

部が均質ということがあるからである。つまり、プロセス全体のどの一部を任意に取り上げても、それは全体の代表となるのである。

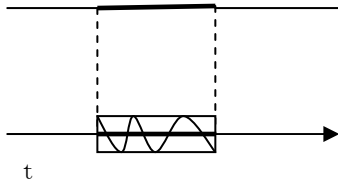


図 12 (c)

最後に例文 4 である。これは、perfective な行為が現在形で表わされた例であるが、少々問題が生ずる、なぜならば、先に述べた Langacker による現在形のコア・イメージでは、「現在時制はプロファイルされたプロセス全体が取り上げられ、それが発話に要する時間と一致するものである」となるので、perfective な動作の始まりから終わりまでが行われる時間と発話に要する時間が一致するということが現実上、一部の例外を除いてはあり得ないのである。行為に要する時間の方が、通例、発話に要する時間よりも長い場合、一致が起こらない。それゆえ、perfective な行為は、何度も繰り返し、繰り返されたプロセス全体の集合全体を捉えれば、均質である解釈ができ、imperfective な読みができるため、図 12 (c) の imperfective 用法の現在形と同様に解釈が可能となる。以上の理由から、perfective な動詞が現在形で用いられた場合は、習慣の読みが普通となる。

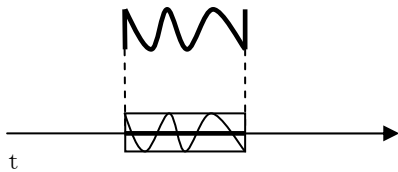


図 12 (d)

最後に、perfective な行為において、行為に要する時間と発話に要する時間が一致する場合(図 12 (d)で示される)はどのような場合に当てはまるかをみてみたい。次の

例文をみてみよう。

6. I pour the milk into the mixture.
7. Smith gets the ball, Smith passes to Jones, Jones shoots.
8. So this guy comes up to me and he says...
9. I apologize.

(Lee 2001: 151-152)

6 のように料理番組における実演、7 のようにスポーツの実況中継、これらは、発話時間と行為に要する時間がほとんど一致しているため、perfective が現在形で用いられる。また、8 のようなナレティブでは、問題となっているのは、実際の行為ではなく、それを伝達している話し手と聞き手の頭の中でイメージされている事態であるから、発話時と頭の中での事態の展開が一致する。9 では、I apologize.とすることで、謝罪を実行しているため、発話時間と行為に要する時間がほとんど一致していると言える。

V. 授業実践への応用

ここでは、IVで述べてきた認知文法の理論を参照した教育英文法の考え方に基づく授業実践例を紹介する。その際の留意点は、プロトタイプ事例及びコアの概念を理解させることにあり、周辺事例に関しては、コアの概念でその都度対応できる言語感覚を身につけさせることが目標となる。そのためには、IIで述べた「英文法の基盤にある人間の認知能力」を意識させることが、個別の文法現象を扱う授業の前提として必要である。この点に関しては、別の機会に論ずるとして、ここでは、可算名詞と質量名詞の概念、及び、単純現在形と現在進行形の概念を大学生及び社会人の標準的な学習段階以上の英語学習者に筆者が教授している場合の例である。

5.1 可算名詞と質量名詞の場合

英語を訳語に頼らず、感覚的に捉えられるようになる

こと。言語に対する気づきを促し、学習の動機づけ(殊に、intrinsic motivation を高める)をすることを目標とし、クイズ形式の質問を考えさせることで、名詞の可算・質量の概念を理解させる。

Quiz 1. 「いぬとねことでどちらが好きか」を英語ではどのようにたずねますか？

この問題に対しては、Which do you like better, dog or cat?という回答をする学習者が必ずみられる(学習者のレベルが高い場合でも)ので、ここを糸口に可算・質量の概念を導入する。

このような解答では、dog/cat は質量名詞としての解釈を受けてしまうため、犬の肉と猫の肉を表わすことになる。犬や猫を食べる文化圏ではこのような発話も可能であるが、そのような習慣のない文化では、不自然な文となる。問題文の内容を表わすには、Which do you like better, dogs or cats?と可算用法を用いなければならないことを指摘する。

Quiz 2. 次の(a)(b)の意味の違いは？

- (a) I ate chicken last night.
- (b) I ate a chicken last night.

この問題では、chicken が(a)のように質量用法で用いられれば、鶏肉を食べたという意味で、その分量はどれだけでも良いことを意味するのに対し、(b)のように可算用法で用いられた場合は、丸ごと一匹食べたという意味になることから、質量・可算の概念を説明できる例である。

Quiz 3. どんなじゃがいもですか？

- a. potato b. a potato c. potatoes
- d. the potato e. the potatoes

名詞の文法では、冠詞の理解と可算・質量の概念の理解が大切である。ここでは、a/the の使い方と質量／可算の使い方を理解させる。受講生に、(a)~(e)がそれぞれどのようなジャガイモを表わすかを話し合わせ、発表させ

る。

(a)は形がイメージされないジャガイモで、切ったり、すりつぶしたりされて原形を留めていない。(b)は丸ごとのジャガイモが1つある。(c)は丸ごとのジャガイモが2つ以上ある。(d)は話し手と聞き手の間で1つに決まる特定のジャガイモがある。例えば、料理に使おうと思って机の上に置いてあったジャガイモが見あたらない場合に、Where is the potato I left here?といった状況である。(e)は(d)の状況で、2個以上のジャガイモが問題となっている場合である。

まとめ：Count/Mass のコア・イメージ

●Count nouns：区切りがあり、それ以上分割できない、内部は不均質と捉えられる、増大させるには数を増やす

●Mass nouns：区切りはなく、分割可能、内部は均質と捉えられる、伸縮自在

★名詞に可算(count)と不可算(mass)という区別があるだけでなく、それぞれの状況で人間がその名詞をどのように捉えるかの問題である。
→言語はダイナミックなものである！

ここでは、可算／質量名詞に関して、これまでの問題で、クイズ形式で考えてきたことをまとめの形で提示する。文法能力は subconscious な理解が理想的であるという視点から、これまでの具体例での説明で十分であり、このような抽象化は必要ないとも考えられるので、学習者の状況に応じては、上記「まとめ」は省略する場合もある。

Quiz 4. 次の文は、誰の発話ならば可能か？

I don't like shelf. I'd rather eat table.
(Langacker)

ここでは、Langacker の文を用い、コンテキストを整えば、人間の視点からはあり得ない文でも、自然な発話となる

ことに目を向けさせることで、名詞の可算／質量という概念が、名詞によって決まっているのではなく、用法に過ぎないことを理解させる。アニメのキャラクターとしてのシロアリの発話なら、4 はあり得る例である。見方を変えれば、I don't like shelf. という文が不自然な発話と捉えられる理由は、人は棚を食べることはないという人間の持つ知識から判断されることである。しかし、棚を食べるシロアリの視点から見れば、この発話は可能なのである。

Quiz 5. 同じ名詞が可算／質量と使い方が変わることによって、(a)と(b)で意味がどのように変わるかを考えてみよう。

1. (a) There is a lot of carrot in the stew.
(b) There are a lot of carrots in the stew.
2. (a) Jack drunk a few beers at the bar.
(b) There's beer in the fridge.
3. (a) There were a lot of newspapers in the box.
(b) There was a lot of newspaper in the box.
4. (a) I see red. (b) I see a red spot.
5. (a) I see board. (b) I see a board.

ここでは、可算／質量で意味が変わる興味深い例をいくつか示し、これまでの内容理解を練習させる。1, 3, 4 の問題は 3.1.3 で挙げた例と同じものなので、解説は省略するので、3.1.3 を参照されたい。1 は、(a)がシチューににんじんが、刻んだり、解けた状態で入っているのに対し、(b)では、にんじんが丸ごと、原形を留めたままいくつも入っているという想像し難い状況である。2 では、(a)はボトルやジョッキに入ったビール、入れ物が前景化された表現であるが、(b)はビールというもの、つまり、容器ではなく物質そのものが前景化された表現である。5は、(a)は板の一部が、例えば、壁に穴が空いていて見えている場合、(b)は、板一枚全体が視野にある場合である。

Quiz 6. baggage, money, furniture, information, advice はなぜ不可算名詞と捉えられるか？

ここでは、高校までの英語教育では、不可算名詞として暗記してきた語彙について、Langacker の認知文法の考え方を応用して、その理由(動機付け)に目を向けさせ、可算／質量の概念の理解をさらに深めさせる。つまり、これらの語彙が表わす対象は、決まった形はなく、どこを取り出しても均質と考えられる。しかし、この理解には、英文法の基盤にある認知能力の1つ、granularity (対象をどの程度の精密度で捉えるか)の視点を意識させる必要がある。例えば、furniture であるが、これは、具体的な椅子や机を表わすのではなく、家庭生活を容易にする道具という抽象レベルで対象を捉えているため、質量名詞となる。

**Quiz 7 なぜ次の名詞は複数形で用いられるか？
scissors, pants, trousers, binoculars,
tweezers, glasses, spectacles, clippers**

ここでは、2つの部分から成り立つという動機付けがあるために、通例、複数形で用いられる例を挙げ、次の Quiz 8 を考える前提とする。

Quiz 8 Group 1 と 2 は複数形であるのに対し、Group 3 が単数形であるのはなぜか？

- Group1: socks, gloves**
- Group2: pants, trousers, stockings, nylons
(cf. panty hose <G>)**
- Group3: a coat, a shirt
(cf. bra (brassiere <F>))**

ここでは、いずれも 2 つの部分から成るが、図と地の反転という認知能力から、どの部分が前景化するかによって複数か単数かが決まる点を指摘する。つまり、Group1 は2つの独立した部分がセットになっており、Group2 は全体の大部分を占める部分が 2 つの部分である。

Group3 は全体の大部分を占める部分は胴体部で1つなので、単数形という動機付けである。また、疑問を持った受講生の質問などの必要に応じて、panty hose や bra など外来語については、この原則は当てはまらないことにも触れる。

5.2 perfective/imperfective の場合

動詞の perfective/imperfective についての授業を行う前提として、現在形は現在の時点で事実と捉えられていること、過去形は距離感(現実・心理・相手)、will は予測」という時制の基本イメージの確認から導入した後、perfective/imperfective の話につなげていく。受講生の到達段階によって異なるが、基礎レベルの場合は、この授業の前に、時制に関する基本的な授業が行われていることが前提となる。ここでは、標準レベルの例を示す。

Quiz 1. 過去形のコア・イメージは？

- a. I skipped breakfast this morning.
- b. Could you help me out?
- cf. Can you help me out?
- c. “We’ll be having a party this Friday. Would you like to join us?”
“I wish I could, but I have other plans.”

ここでは、過去形のコア・イメージが距離感であることを確認する。a はプロトタイプである、現在からの時間的な距離感を、b は Can you help me out?との対比で、can に代わって could が使われていることに注目させ、相手からの心理的な距離感を持つことで、丁寧さを表すことを確認する。c はいわゆる仮定法過去と呼ばれているものであるが、これも現実からの距離感と捉えられる。I’m sorry I can’t.と事実を伝える方法もあるが、過去形を用いることで、現実と反対のことを述べることで、やわらかい表現にしているとも言える。

Quiz 2. 次の(a)(b)の英文は、どちらも未来の内容を表すが、(a)は単純現在形、(b)は will + 動詞の

原形が用いられているのはなぜ？

- a. Tomorrow is Thursday.
- b. I’ll be 21 tomorrow.

ここでは、isとwill beの意味の違いについて目を向けさせる。is は「事実」を表す形であるのに対し、will は「予測」を表す形である。a では、明日が木曜日であることは、カレンダー上の予定であり、発話の時点で確定している事実であるから、is が用いられている。b では、発話の時点では、まだ、21 歳になっていないので、「明日 21 歳になる」というのは明日にならなければ事実とはならないので、発話時においては予測である。しかし、言っている本人は、100%実現すると思っている予測である点も指摘したい。もしも、何らかの事情で可能性が低いと思っている場合は、may, might などを用いることになる点にも目を向けさせたい。

Quiz 3. 次のうち不自然な文はどれか？また、その理由は？

- a. Einstein visited Princeton.
- b. Einstein has visited Princeton.
- c. Princeton was visited by Einstein.
- d. Princeton has been visited by Einstein.

ここでは、英語の時制は、現在と過去の2つしかないという視点からの時制の確認である。その場合、完了形と進行形は時制の1つの側面と捉え、現在完了・現在進行形は現在、過去完了・過去進行形は過去と捉える。また、この問題のもう一つのポイントは、ある言語表現が自然かどうかの判断には、言語以外の知識が関連することにも目を向けさせることである。つまり、Einstein は故人であるから、故人に現在形を用いた b は不自然ということである。一方、プリンストン大学は現在も存在するので、c と d は自然な文である。ちなみに、Einsteinを現在生きている人の名前に換えれば、a も b も自然な文になることも指摘したい。

Quiz 4. 次の4つの文の意味の違いは？

- a. Jack has been seeing Maria for two years.**
- b. Jack had been seeing Maria for two years when I first met him.**
- c. Jack will have been seeing Maria for two years next March.**
- d. Jack would have been seeing Maria for two years.**

この問題の英文は、従来の学校英文法では「現在完了進行形」「過去完了進行形」「未来完了進行形」「仮定法過去完了」と呼ばれ、相互に関係はなくいずれも複雑な形式として個別に教えられてものであるが、これらの文も、(1)英語の時制は現在と過去の2つ、(2)will は予測、(3)過去形は距離感、という3つの原則さえ知っていれば、難なく理解できることに目を向けさせる。

つまり、aは「ジャックはマリアと付き合って2年になる」という意味で、それが発話の時点で事実であることを表す。bは過去形の had が用いられているので、「ジャックがマリアと付き合って2年」というのは過去の話であることになる。when 以下に、「私が初めてジャックに会ったとき」という過去の時点が続くので、その時付き合って2年であったことが理解させる。cは will が用いられているので、「予測」を表す文であることがわかる。next March が文末にあるので、今度の3月のことを予測している文である。問題2でも言及したが、予測と言っても will は100%近い確信度での予測である点にも目を向けさせたい。dは will の代わりに would(過去形)が用いられているので、何らかの距離感を表すことになる。1つの解釈としては、「先月別れてしまったが、まだ付き合っていれば、(If I were still dating Maria, ...)3月で2年になるのに」となる。

以上は、時制に関する基本事項の確認を促すための導入である。ここから、動詞の perfective/imperfective 用法を表す文法的特徴、単純形と進行形の違いの話に入っていく。

まず、単純形と進行形の基本イメージを提示すること

をスタート時点とする。背景となる理論的枠組みは、4.3で述べた通りである。ここでは授業実践という性質上、また、どの動詞も文脈次第では、perfective / imperfective のいずれの解釈も受け得る場合が多いという事実から、動詞自体にそのプロトタイプが perfective なものと imperfective なものがあるという話は、混乱を避けるために触れずに、単純現在形と現在進行形のイメージという段階から導入する。

単純現在形と現在進行形のコア・イメージ

- (a)始まりと終わりがあり、その途中にあると捉えられることは、現在進行形で表わされる。**
- (b)どの1時点をピックアップしても同じと捉えられる事態は、単純現在形で表わされることは、**

以下、次のような練習問題を提示して、単純現在形と現在進行形のコア・イメージを理解させる。

Quiz 5. (a)と (b)の意味の違いは？

- 1. (a) My father smokes.**
(b) My father is smoking.
- 2. (a) I live in an apartment on my own.**
(b) I'm living in an apartment on my own.
- 3. (a) I drive a Toyota.**
(b) I'm driving a Toyota.
- 4. (a) I love it!**
(b) I'm loving it!
- 5. (a) Maria resembles her mother.**
(b) Maria is resembling her mother more and more.
- 6. (a) A statue by Rodin stands in the lobby.**
(b) A statue by Rodin is standing in the lobby.

ここでは、perfective/imperfective のいずれで解釈するかで意味が変わる例を練習させる。(3.2.2 で説明に用いた例なので、ここでの説明は割愛する) 現在形は maximal viewing frame, be + V-ing 形は restricted viewing frame であることを意識させる。また、ある言語表現が acceptable か否かは、syntactic にだけでなく pragmatic な面が大きく影響することにも目を向けさせたい。

次に、be + V-ing 形のさまざまなタイプ(動詞の性質による違い)を学習させる。ポイントは、共通のコアがあることを理解させる。(cf. 3.2.2) プロトタイプ理論によるカテゴリー化の概念が考え方の背後にあり、具体的レベルではイメージの違いがあるが、いずれも始まりと終わりが背後に意識された事態の途中にあるという共通のコアから理解可能であることに目を向けさせる。

Quiz 6. 次の文の意味は？

- (a) The boy is dancing.
- (b) The girl is hiccupping.
- (c) The train is stopping.
- (d) The battery is dying.
- (e) The boy was drowning.

(a)はプロトタイプ事例で、ダンスをするという行為には、始まりと終わりがあるが、現時点で、その途中(最中)であるという意味を表す。(b)しゃっくりは1回だけであることは稀で、普通は、何度も連続する。その連続するしゃっくりの1回1回は完結しているが、はじめの1回から始まり、最後の1回で終わるので、全体を1つのグループと捉えれば、始まりと終わりのあることの途中というイメージが浮かび上がってくる。(c)(d)は完結に向かうタイプであるが、バッテリーが切れる、溺れるといった事態は、その前から、完了へ向かう兆候が始まるので、その部分から行為が始まったと捉えれば、これらの例も始まりと終わりのあることの途中というイメージで捉えることができる。

【参考文献】

- Bolinger, D. (1977). *Meaning and Form*. London and New York: Longman.
- Imai, T. (2008). 'A Theoretical Consideration of Fundamental Cognitive Abilities Underlying English Grammar for Communication' 愛知教育大学英語英文学会紀要 *CLARITAS 21*, pp.3-22,
- 河上誓作 (1996). 『認知言語学の基礎』 研究社出版
- Langacker, R. W. (2002). *Concept, Image, and Symbol - The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive Grammar - A Basic Introduction*: Oxford University Press.
- Lee, D. (2001). *Cognitive Linguistics --- An Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (宮浦国江訳 (2006).『実例で学ぶ認知言語学』東京:大修館書店)
- Radden, G & Dirven, R. (2007) *Cognitive English Grammar*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company
- 田中茂範, 佐藤芳明, 阿部 一 (2006). 『CORE CHUNK 英語感覚が身につく実践的指導 コアとチャンクの活用法』 大修館書店
- 柳瀬陽介 (2007). 『第二言語コミュニケーション能力に関する理論的考察』広島: 溪水社

★この論文は、2008年6月に開催された「中部地区英語教育学会」にて口頭発表した内容を基に、大幅な加筆・修正を加えたものである。

原著